

# 巻頭言

## 「地の塩と確かな社会」

理事長 新谷友良

新型コロナウイルスで騒然とした毎日が続く、心のささくれ立ちを感じます。そんな中、マタイ福音書の「地の塩」を思い浮かべました。

マタイ福音書には、自分に耳を傾けようと従ってきた弟子たちと、それを困む群衆に向かって、イエズスが「あなた方は地の塩である」といった、とあります。塩は世に味わいを添え、腐敗を防ぎ、清潔を保ちます。「あなた方は地の塩となりなさい」ではなく、「あなた方は既に地の塩なのである」というイエズスの思いは、親鸞の悪人正機説を連想させます。

3月の朝日新聞に三つの記事が載りました。一つは、デパートが通信販売するハム・ソーセージを作っている「上州水土舎」という障害者の自立を担う社会福祉法人のこと。食品表示法の施行で、製品に製造者名を載せることが必要になり、障害者施設であることが明らかになる「社会福祉法人」の表示が不安視されたが、デパートの担当者は「美味しさが最優先。つくるのが障害者か否かは全く関係ない」と言い切り、売り上げの落ち込みはなかったと載っています。

もう一つは、「トイレが変わればまちが変わる」と「日本トイレ協会」を立ち上げた山本耕平さんのこと。昨今の公衆トイレは格段にきれいになり、車いす対応のトイレも増えましたが、災害時対応などはまだまだと、「トイレがつくるユニバーサルなまち」という本を出版し、自治体に「トイレ課」を置くことを提言していると紹介されています。

そんな中、福島原発事故が子どもに与えた影響の取材を続けている知人のお嬢さんのことが、同じ朝日新聞に載りました。彼女は仲間と共に「国が子どもたちの健康に対して責任のある政策をとっていない今、地域に暮らす住民や学校関係者は何をなすべきか」をテーマに、「3.11後の子どもと健康」というブックレットを書きました。

日本には、世界に誇るべき「地の塩」として、国連難民高等弁務官だった緒方貞子さんやペシャワールの会の中村哲医師がいます。また、朝日新聞の記事にあるような多くの「地の塩」がいます。そして、新聞に載ることのない、私たちの周りの「地の塩」が「世に味わいを添え、腐敗を防ぎ、清潔を保って」、確かな社会を作っていることを実感します。多くの「地の塩」の力がコロナウイルスに打ち勝つ日は近いと思います。